

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

谷 昌 恒 氏

1922年、東京に生まれる。

1945年、東京帝国大学理学部地質学科を卒業。敗戦の脱力感による放浪の途上、大阪駅で出会った戦災孤児から物乞いをされ、「悲惨なものにすぎると悲慘な子がいる」との思いを胸にする。同年暮れより、福島県棚倉町に堀川愛生園を創設、阿武隈高原の谷間、作物もできぬとされた不毛の土地を自力で切り開き、丸太の上に板を敷いただけの小屋で、孤児たちと職員が家族同然に生活する家庭舎を始めた。20年の歳月を愛生園に注ぎ込み、施設の移転などの困難を乗り越え、事業を軌道に乗せた後、大内兵衛氏の勧めで、1965年、社会保障研究所に移り、4年間東京で研究生活を送る。1969年、当時の北海道家庭学校長、留岡清男氏の強い招請により、同校長として赴任、現在に至っている。

北海道家庭学校は、東京巣鴨に家庭学校を創設した留岡幸助氏が1914年、現在の遠軽町留岡に分校と農場を開設したのに始まる。約430ヘクタールに及ぶ山野に校舎や寮が点在し、「森の学校」とも呼ばれるように、「自然は人間を大きく感化する」という創設者の精神が、今も息づいている。現在、日本で唯一の民間男子教護施設として、学校や家庭からはじき出された10歳から17歳の少年たちが、50人から80人、1年半から2年の間、職員約30人と寝食をともにし、酪農、土木、果樹などの生産活動をしながら、基礎学力を身につけようと努力している。不遇な環境の中で精一杯抵抗していた子どもたちが、

よく働き、よく食べ、よく眠る、「三能主義」のもと、また教える者と教えられる者との真剣な対決を通し、環境に立ち向かう力を育てられ、社会へと巣立っている。その数は1,900人を超えている。

1992年、氏の活動に対して、日本の児童福祉事業の先駆者、石井十次を記念する第一回「石井十次賞」が贈られている。また、著書として、『福祉国家の理想と現実』（東大出版会）、『ひとむれ』（評論社）、『教育の理想』（評論社）、『いま教育に欠けているもの』（岩波ブックレット）などがある。

氏は自らの経歴の中で、旧制高等学校理科時代、長田新の翻訳したモルフの『ペスタロッチー伝』全5巻の読書会を行ったことにふれ、「孤児の父」ペスタロッチーとの出会いを人生の不思議な符合として、氏の後の仕事に結びつくものとされている。氏の活動は「教育の原点」を示すものとして、ペスタロッチーの精神に通底するものであろう。